

## 著明な改善を認めた遷延性意識障害患者の一事例を振り返る - 看護は何が出来たのか

大前 綾子<sup>1</sup>、水元 志奈子<sup>1</sup>、片岡 恵美子<sup>1</sup>、金田 憲司<sup>1</sup>、谷 昌裕子<sup>1</sup>、足立 幸枝<sup>1</sup>、八木 良子<sup>1</sup>、松村 望東美<sup>1</sup>、衣笠 和孜<sup>1</sup>、大久保 暢子<sup>2</sup>

<sup>1</sup>独立行政法人 自動車事故対策機構 岡山療護センター、<sup>2</sup>聖路加看護大学

【目的】頭部外傷を起因とする遷延性意識障害患者は、脳血管障害に比べると回復の可能性が高いと言われている。今回、当センターにおいて、受傷後約2年半を経て入院し、その後約2年半のケア提供の中で、著明な改善を認めた患者が存在する。この一事例を振り返り、その患者の回復に看護は何が出来たのか、回復の支援が出来たのかを分析する。【対象および方法】対象は、岡山療護センターに入院する重症頭部外傷を起因とした遷延性意識障害患者1名（入院時年齢 31歳。男性）。方法は、患者の経過記録の中からケアの内容を患者の状態と共に抽出し直した。抽出したデータは、患者の状態と提供されたケアとの関連性、患者に関する看護師の言動や活動の意味を分析し、看護の重要性を考察した。【結果】本対象者は、入院時広南スコア54点であったが、約2年半後、7点にまで改善し、経管栄養、便尿失禁状態、全介助での移乗であったのが、自力摂食、自己採尿、自力移乗が可能となった。これらの回復の経過に対して、回復の兆しを鋭くキャッチし、その患者の状態を生活行動の獲得に結び付けるために、適時、ケアを変更し、改善した患者の身体状態の方向付けを行っていた。【考察及び結論】どんな看護ケアを提供されていたとしても、患者の病態によって自然と回復していく患者はいる。しかしその回復の兆しを瞬時に捉え、単なる反応を生活行動の獲得や意思疎通の手段といった点に結び付ける事が出来るか、もしくはその方向付けができる否かが患者の最終的な状態に繋がっているのではないかと考える。